

保育者養成における領域「人間関係」についての一考察

—96年度生の実習における「抱っこ」を通して—

長根 利紀代

I はじめに

近年の社会変化による保育ニーズの多様化にともない、保育現場における保育のあり方が見直されている。幼稚園教育においても平成9年6月「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育のあり方について」の資料が調査研究協力者会議の中間報告としてまとめられ、改善の基本方針のなかで教師の役割の明確化を重視し、「教師には、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児とともによりよい教育環境を創造していくことが求められているが、そのための教師の役割としては、物的・空間的環境を構成する役割とその環境の下で教師自身が幼児とどうかかわっていくかという2つの基本的役割がある。」¹⁾と述べられている。そして、幼児の居場所として、モデルとして、さらに、共同作業・共鳴者、理解者、遊びの援助者としての役割が明示されている。また、幼稚園運営の弾力化として幼児教育のセンター的役割と女性の社会進出の拡大などを背景とした預かり保育の推進などが盛り込まれてることから、今後ますます身近な大人としての保育者と幼児との人間関係のあり方が問われることになるであろう。しかし、近年においては保育者を目指す学生自身が核家族化、少子化をはじめ、さまざまな社会問題の中を育ってきており、対人関係や集団生活に悩みを持った経験も少なからず持っている。また、大学入学までに幼い子どもと触れあった経験があるものも多くはない。入学後、実習生として現場で子どもとどのように関わっていったらよいのか、また、そのきっかけをどのようにつくったらよいのかなどに不安を抱き、非常に緊張するものが目立つ。そんな学生が実習生として保育現場でどのように子どもたちと人間関係の基盤となる信頼関係を築いてきたのかが注目される。また、このことは領域「人間関係」にとって大変重要な点であると考えられる。保育所保育指針（以降保育指針とする）には子どもと大人の関係について「子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることによって、自分も大人を愛し、信頼していくようになる。大人との相互作用によって情緒的に安定し、大人の期待に自ら応えようという気持ちが育ち、次

第に主体的に活動するようになる」²⁾とあり、こうした大人と子どもとの日々の生活の中で、子どもと保育者との間に情緒的な絆が形成され、これが対人関係の第一歩となると述べられている。ハーロウ (Harlow, H, F.) の赤毛ザルの実験で接触による心地よさと満足感の重要性が明らかにされたように、保育者の援助なしで生命の保持さえできない乳幼児をありのままに受容し、信頼関係を築き、甘えなどの依存欲求を満たしつつ自立への発達を支えるには、ほおずり、抱きしめるなどのスキンシップは欠かすことはできない。授業でも現場の実践例として「抱っこ」のVTRを取り上げ、保育の中での「抱っこ」のあり方について考える機会をもった。そこで、本研究では本学学生の実習体験から「抱っこ」を取り上げ、保育指針や幼稚園教育要領 (以降教育要領とする)、特に領域「人間関係」の視点から保育現場における学生と子どもとの関わりについて考察したい。

II 研究方法

96年度生に「抱っこ」についてのアンケートを実施し、その集計結果を基に考察する。

調査期間 1997年7月

対 象 1996年度入学生 2年次

回 答 数 193名 506事例のうち有効回答数495事例 (乳幼児495名) 実施方法 授業終了時にアンケート用紙を配布し、後日回収し回答を得た

調査項目 時期的に教育実習・保育実習共に終了した時点であったところから、両実習体験を考慮した。(①・③は○印、②④⑤⑥は自由記述)

① 「抱っこ」と保育施設について

② 子どもの年齢

③ 子どもの性別

④ 「抱っこ」した理由

⑤ 「抱っこ」した結果

(ここまでの項目を1事例分として、可能な人は3事例まで書き込めるようにした)

⑥ 「抱っこ」の心がけ

実習期間 教育実習 1996年10月15日～1997年6月5日

(1年次-実習回数14回・2年次-8回 毎週1回の通年実習による)

1997年6月9日～21日

(2年次-実習回数-6回 毎日連続の集中実習による)

保育実習 1997年7月8日～19日

(2年次-実習回数-12回 毎日連続の集中実習による)

Ⅲ 調査結果と考察

「質問1、保育現場で子どもを抱くことが何度かあったと思いますがどんなときに抱きましたか。またその理由は何でしたか。そして抱くことによってどんな効果（変化）がありましたか。」について

1 「抱っこ」と保育施設について

総事例数495名の内、5歳児～3歳児では、幼稚園170名、保育所173名で保育所が3名多くなっており、保育所2歳児～0歳児は152名で、保育所の事例数は合計325名となる。ここでみると教育実習は期間も長く、実習回数は22回となるが保育実習は12回で幼稚園が10回多くなっている。3歳児から5歳児までの「抱っこ」回数の平均値を出してみると、幼稚園は一日平均約7.7回、保育所が約14.4回となることから、保育所での養護など「保育に欠ける」面への子どもとのかかわりとしても、子どもにとっての「抱っこ」の必要性が考えられる。尚、教育実習期間2年次に新入園の時期が含まれていることは注目される条件となる。（表1）

表1

年令	幼稚園			保育所						合計
	5歳児	4歳児	3歳児	5歳児	4歳児	3歳児	2歳児	1歳児	0歳児	
人数	28名	44名	98名	48名	43名	82名	72名	51名	28名	495名
(分離不安)	(1名)	(8名)	(22名)	(1名)	(1名)	(7名)	(18名)	(12名)	(2名)	(72名)

2 「子どもの年齢」とのかかわりについて

「抱っこ」をした人数と子どもの年齢との関係についてみると、幼稚園での事例総数170名の内5歳児28名4歳児44名3歳児98名で抱っこの多い順では3歳児、4歳児、5歳児となる。一方保育所は5歳児48名4歳児43名3歳児82名、そして2歳児72名1歳児51名0歳児28名で、順位は3歳児、2歳児、1歳児、5歳児、4歳児、0歳児になっており、いずれも3歳児が1位となっているが、この時期は自我をはじめとする心身の発達がめざましく、反抗期にもかかる時期であり、主体性が急速に発達することから自分の思いと現実の間を揺れる中で情緒不安にも傾きやすいことから、大人から受け入れられているという安心感を「抱っこ」によって実感できることは大切である。この点においては

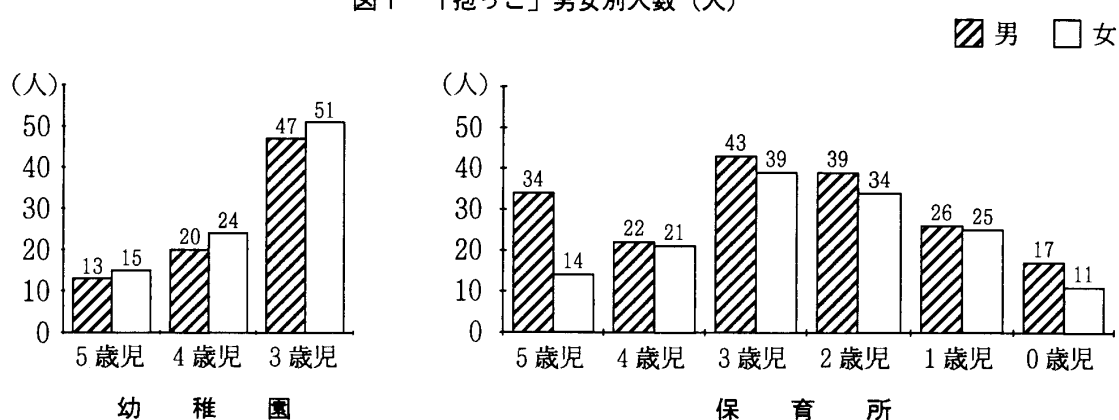
2歳児の人数が保育所で2位になっていることから伺えるが、実習時期を考慮すると幼稚園実習（教育実習）には4、5月が含まれているが、保育所実習（保育実習）は7月のスタートとなっていることを忘れてはならない。ここでこの点を保護者との分離不安で見ると、幼稚園では3歳児が20名、4歳児が8名になっている。保育所では3歳児は7名となっている。これらは、保育指針の配慮事項3歳児では、人間関係「(2)初めて集団生活する場合には、特に心身の疲労を緩和するように配慮し、なるべく個別に対応する。次第に後期に向けて集団生活に適應できるようにする。」³⁾ とあるように保育所でも新入園児への配慮が必要な時期であり、特に、幼稚園では近年の3歳児就園率の上昇傾向から見ても、さらに重点がおかれるもので、教育要領では、領域人間関係の内容に「(1)喜んで登園し、先生や友達に親しむ」⁴⁾ となっていることから、入園当初の不安の大きい時期に抱っこによる信頼関係の基礎づくりは子どもと保育者相互にとって必要且つ有効なものであると考えられる。また、2歳児でも分離不安が18名となっているのは、この年代に見られる母親など特定の大人に対する執着心の強さが影響していることも考えられる。4歳児は幼稚園44名、保育所43名でほぼ同数であるが、5歳児は幼稚園28名、保育所48名で後者が20名多い。保育指針をみると、配慮事項には2歳児の「(9)子ども同士のぶつかり合いが多くなるので、保母はお互いの気持ちを受容し、分かりやすく仲立ちをして、根気よく他の子どもとのかかわり方を知らせていく。」⁵⁾ 3歳児人間関係「(1)友達との関係については、保母や遊具その他のものを仲立ちとして、その関係が持てるよう配慮する。」⁶⁾ いずれも保母の「仲立ち」の必要性を明確にしている。4歳児では「人間関係」の箇所に「仲立ち」の言葉は消えて子どもと保育者双方の主体的なかわりが述べられている。しかし、5歳児になると人間関係「(1)個々の子どもの欲求に適切に応じ、保母と子どもの信頼関係を深め、個人差に十分に留意して、友達とかかわる中で、個人や社会生活に必要な習慣や態度が身に付くように配慮する。」⁷⁾ として保母と子どもの信頼関係を深めることが強調され、5歳児は小学校入学も迫り、自分や周りを見つめ、自分なりの理想や周りからの期待を感じて努力している。従って、それゆえの不安やプレッシャーを抱えることも多い。しかしながら保育所は「保育に欠ける乳幼児」を保育していることから年長児に抱っこが必要な場面が多いことも考えられるのである。(表1)

3 「性別」について

男児・女児の人数差を幼稚園・保育所を総合して見ると男261名、女234名で男が27名増である。施設別に見ると幼稚園は男80名女90名で女10名増、保育所は男181名女は144名で男が37名増となる。(図1)。

各施設共年齢別に見ると、幼稚園では5歳児は男13名女15名で女2名増、4歳児男20名女24名で女4名増、3歳児男47名女51名で女4名増でいずれも女児が多い。保育所では5歳児男34名女14名で男20名増、4歳児男22名女21名で男1名増、3歳児男43名女39名で男4名増となりいずれも男児が多い。さらに2歳児でも男39名女34名で男5名増、1歳児男26名女25名で男1名増、0歳児でも男17名女11名で男6名増となっており、保育所においてはいずれも男児が多いという結果となった。この点は保育所の現職保育者との話の中にもしばしば年齢にかかわらず男児のほうが抱っこをねだるなど甘えが多いことが報告されている（図1）。

図1 「抱っこ」男女別人数（人）



4 「抱っこ」の理由及び「結果」について

「抱っこ」の理由については、自由記述の回答を内容によって、a「子どもからの要求」、b「親愛の情を交わした」、c「自分から」、d「障害児」、e「その他」とにまとめた。「a子どもからの要求」は子どもから甘えてきたもので、悲しいときや寂しいとき、また、けんかに負けた悔しさや保護者のいなくなった心細さなどを訴えてきたなど子どものほうから抱きついてきたり要求された場合のものでまとめ、「b親愛の情を交わした」は実習期間内に培われる子どもと実習生との心の交流によるものを中心にまとめた。また、「c自分から」は子どものさまざまな姿や心情への対応、教育やしつけなどに関するもので実習生から抱いた場合のもの、「d障害児」は障害児に関するもの、「eその他」はままごとやゲーム、うんていの補助など遊びのためのものや担任からの指示によるものなどでまとめた（表2）。

「抱っこ」の結果については上記と同じく自由記述の回答を内容によって、f「情緒の安定がみられた」、g「コミュニケーションが深まった」、h「障害児」、i「その他」としてまとめた。

「f 情緒の安定がみられた」は「抱っこ」によって泣きやむ、落ち着く、機嫌が直ったり元気が出たりなど子どもの態度の改善が見られたり。楽しく遊びやさまざまな活動に前向きに取り組めるようになったものでまとめた。

「g コミュニケーションが深まった」は子どもが実習生に素直に挨拶、笑顔など愛情表現をしてくるようになったり、喜びを分かち合ったりし、実習生自身も情愛を持ってかわいがる様子が汲み取れたものでまとめた。「h 障害児」は障害児と関わったものでまとめ、

「i その他」ではゲームの一環としておこなったもの、特に効果や変化の分からなかったものや忘れたものなどを含めた。(表 2)

(1) 項目別人数配分における「理由」と「結果」について

A 「理由」について

総合的に見ると事例総数 495 名のなかで、「a」は 133 名 (26.9%)、「b」29 名 (5.9%)、「c」は 301 名 (60.8%)、「d」は 11 名 (2.2%) になっており、「e」では 21 名 (4.2%) になっている。これで見ると全体では「c」が圧倒的に多数を占めている。

施設別にみると、幼稚園では 170 名の内、「a」44 名 (25.9%)、「b」8 名 (4.7%)、「c」105 名 (61.8%)、「d」4 名 (2.3%)、「e」9 名 (5.3%) となり、実習生から抱っこをした「c」は「a」の 2 倍以上になっている。これは先に述べたように新学期による新入園児の保護者との分離不安が考えられる。一方、保育所では、325 名の内、「a」89 名 (27.4%)、「b」21 名 (6.5%)、「c」196 名 (60.3%)、「d」7 名 (2.1%)、「e」12 名 (3.7%) である。ここでも実習生が「c」の自分から抱いたものが「a」の子どもからのものの 4 倍以上となっている。保育所は子どもが保育所の生活に慣れた時期ではあるが未満児をも含めていることを考慮

表 2 「抱っこの理由」(人)

		幼稚園	保育所		合計
		5~3 歳	5~3 歳	2~0 歳	
a	子供からの要求 (甘え・感情訴え・不安感など)	44 25.9%	46 26.6%	43 28.3%	133 26.9%
b	親愛の情を 交わした	8 4.7%	11 6.4%	10 6.6%	29 5.9%
c	自分から (情緒不安・不満愛情不足)	105 61.8%	99 57.2%	97 63.8%	301 60.8%
d	障 害 児	4 2.3%	7 4.0%	0 0.0%	11 2.2%
e	そ の 他	9 5.3%	10 5.8%	2 1.3%	21 4.2%
f	合 計	170 100%	173 100%	152 100%	495 100%

して、それぞれ 3~5 歳児にしぼって子どもを抱いた人数で比べてみると「a」では幼稚園 44 名 (25.9%) に対して保育所 46 名 (26.6%) で 2 名増、「b」が幼稚園 8 名 (4.7%) に対して保育所は 11 名 (6.4%) で 3 名増、「c」では幼稚園 105 名 (61.8%) に対して保育所は 99 名 (57.2%) で幼稚園が 6 名増、「d」は幼稚園 4 名 (2.3%) に保育所は 7 名 (4.0%) で 3 名増、そし

て「e」は幼稚園9名(5.3%)に保育所10名(5.8%)1名増となる。合計では幼稚園170名に対して保育所173名で3名増ととなっているが、抱っこをした子どもの人数の合計では大差はない。しかし、「c」が保育所より6人多いことは幼稚園の新入園児への対応が抱っこによるところが大きいことがわかる(表2)。

B 「結果」について

上記の「理由」における抱っこの「結果」をみると、総合的には事例495名の内、「f」は384名(77.6%)で、「g」は60名(12.1%)「h」では13名(2.6%)となり、「i」は38名(7.7%)となった。これで見ると、「f」が77.6%という高い数値を示している。その点を施設別にみると、幼稚園では170名の内、「f」130名(76.5%)「g」24名(14.1%)「h」5名(2.9%)「i」11名(6.5%)となる。保育所では325名の内、「f」254名(78.1%)「g」36名(11.1%)「h」8名(2.5%)「i」27名(8.3%)で、「f情緒の安定がみられた」は幼稚園76.5%・保育所78.1%とやはりいずれにおいても高い数値を示し、乳幼児にとって「抱っこ」は実習生がおこなっても十分良い結果を生みだしていることから、学生たちに保育者としての適切な実践力が養われていることが分かる。(表3)

表3 「抱っこの結果」(人)

		幼稚園	保育所		合計
		5~3歳	5~3歳	2~0歳	
f	情緒の安定が見られた	130 76.5%	130 75.2%	124 81.6%	384 77.6%
g	コミュニケーションが深まった	24 14.1%	23 13.3%	13 8.5%	60 12.1%
h	障害児	5 2.9%	8 4.6%	0 0.0%	13 2.6%
i	その他	11 6.5%	12 6.9%	15 9.9%	38 7.7%
	合計	170 100%	173 100%	152 100%	495 100%

(2) 年齢別による「理由」と「結果」について

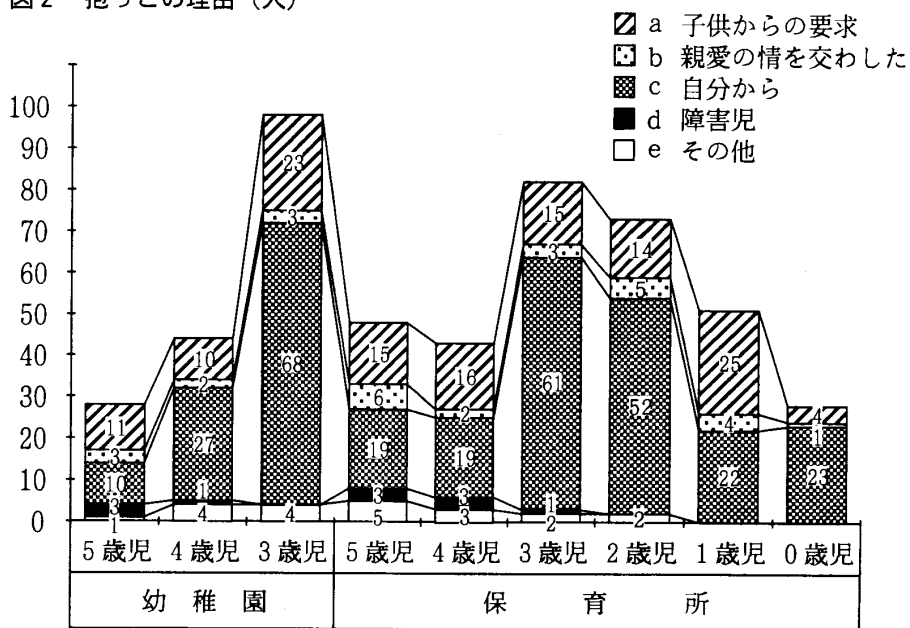
ここで年齢別に、主に子どもからのもの「a」と実習生からのもの「c」を中心に、学生の具体的記述内容や事例を含めて考察する。

① 5歳児について

「抱っこの理由」における、施設毎の「抱っこ」の人数をみると、幼稚園28名に対して保育所は48名で後者が20名増となり、保育所の保育に「抱っこ」の必要性が感じられる。幼稚園では「a」11名「c」10名で「a」の子どもからのものが1名増、保育所では「a」15名「c」19名で、ここでは「c」の実習生からのものが4名増となる。項目別に見ると「a」の要求してきた人数は幼稚園が11名、保育所19名で後者が8名増、実習生から抱いた「c」では幼稚園10名、保育所19名で後者が9名増である。(図2)

ここで項目毎の具体的な理由の内容についてみると、まず、「a」について幼稚園では、子どもに理由を聞いても言わずただ甘えてくる、子どもの様子が普段と違う、イライラしているなど生活の疲れやプレッシャー

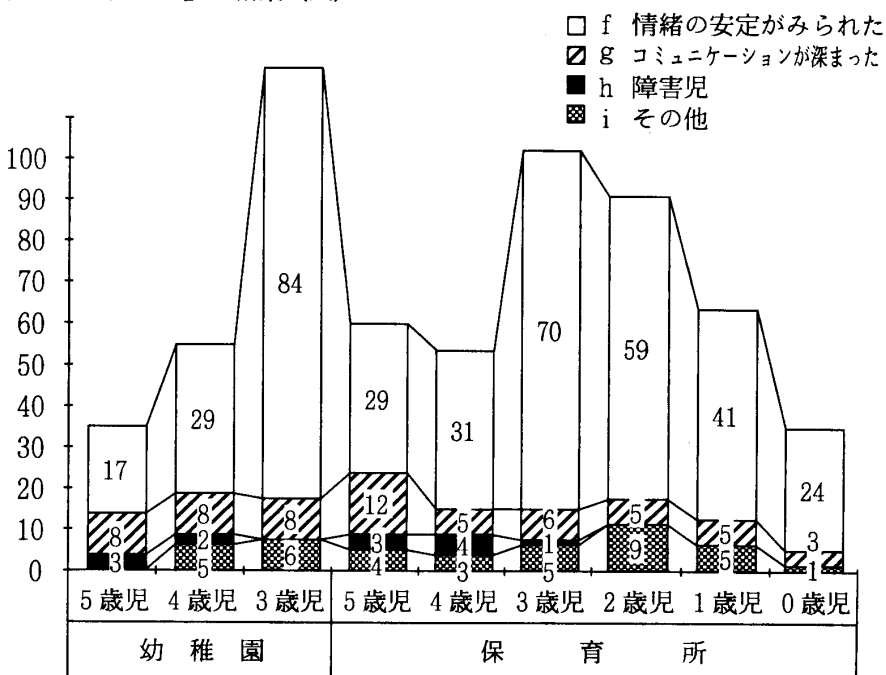
図2 抱っこの理由 (人)



が感じられる。この点保育所では保護者の共働きや長時間保育による愛情不足を実習生に求めている場合が多いことが分かる。また、「c」については両施設とも、ケンカの後始末、甘えを素直に表現できない子の場合や子どもが物事の解決を一人でがんばる様子がみえる (表4)。

「抱っこの結果」についてみると、幼稚園が28名中、「f」17名、「g」8名、「h」3名「i」0名、保育所では「f」29名、「g」12名、「h」3名、「i」4名となり、幼稚園では28名中17名が情緒の安定を示し、8名の子どもとのコミュニケーションが深まる結果になっている。保育所でも同じように抱っこの効果は高く48名中29名が安定し、12名とのコミュ

図3 「抱っこ」の結果 (人)



ニケーションが深まっている (図3)。これらを具体的な結果の内容で見ると、幼稚園・保育所とも共通して落ち着いて自分から活動に参加したことやトラブルをやめ、穏やかな心持ちになっていたことが分かる。

このような点はコミュニケーションの深まった内容を見ても子どもが心を開き、子どもと実習生相互に心暖まる交流があったことが伺える（表5）。

保育指針では5歳児の発達の特徴として基本的な生活習慣の自立や内面的な成長、そして物事に対する判断能力や批判能力も培われ、自分としての存在感をもとめ、仲間との集団機能も発揮されるようになることとある。また、「人間関係」として「内容」10項目の中に友や周りの人々と主体的に関わりつつ、「相手の意見を受け入れる」「思いやりを深める」「迷惑をかけないように人の立場を考える」「譲り合う」「人々に愛情や感謝の気持ちをもつ」などが示されている。6歳児の特徴はさらに体験を通してのものごとの見通しや予測がたち、自信やプライドも高くなることが述べられている。また、「基礎的事項」の「人間関係」(1)では「さまざまな人の存在に気づき、人に役立つことの喜びを感じることができるよう配慮する」⁸⁾とあることから、年長児になると周りを考えてその子なりの頑張りを見せるがそれ故の寂しさや甘えたい気持ちを解消しきれずにいる。また、大人は年長だと言うだけで甘えに厳しい傾向もあるが、実習生は子どもをよく把握し、ありのままの姿を暖かく受容していることが感じとれる。その点についてアンケートの事例を引用して紹介したい。

表 4 5歳児 「抱っこ」の主な理由

幼稚園	保育所
<p>○子どもからの要求 11 (甘え・感情訴え・不安感など) 泣いて抱きついてきた 家であまりしてくれなかった 理由を聞いても首を振るだけで言わない 落ち着かなくいらだっていた 普段と違う様子 生活の疲れやプレッシャー 遊びの最中飛び付いてきた 一人が言うとみんなが要求した</p> <p>○親愛の情を交わした 3 再会のよろこびから いつも反抗的な子が素直に言うことを聞き入れてくれた 登園すると走って飛びついてきた</p> <p>○自分から 10 (情緒不安・不満・愛情不足など) 悲しく弱気になり泣いていた ケンカ後叱られすねていた</p>	<p>○子どもからの要求 15 (甘え・感情訴え・不安感など) いつもやんちゃな叱られっ子の良い面を見付けて認めたら要求してきた いつも居残りの子 ひざのうえに乗ってきた ケンカした 担任に甘えられなかった 大好きと抱き着いてきた 都合の悪いことを紛らわすため 母親がいない 両親共働き</p> <p>○親愛の情を交わした 6 実習最後の日だったので 悪いことを注意したら止めてくれたのでうれしさを伝えた</p> <p>○自分から 19 母親思い出して泣いていた ケンカのあとのホロー</p>

<p>遊べない子への勇気づけ 内診検査不安 親との分離不安 足をばたつかせて興奮状態だった 年長組になったことを得意そうにしていたのでど れくらい大きくなったか試した 腹痛 ケンカ後のホロー</p> <p>○障害児 3 昼寝からの寝起き スキンシップでコミュニケーション 自閉症の子が泣きわめいていた</p> <p>○その他 1 ゲームで勝ったごほうび</p>	<p>求めているのが分かった 乱暴なことをしてきた 要求されたときの状況から 気分の悪い子 友とのケンカを泣いて訴えてきた ケンカで相手をたたこうとした 甘えを現しにくい子でわざといけないことをした 熱があったのでお迎えがくるまで いやと言えず泣きながら自分の中で解決しようとしていたから ケンカで泣いた子を抱いたら相手の子も 元気がなくなったから いつも最後まで居残りだった</p> <p>○障害児 3 昼寝の妨害をする自閉症児 昼寝での寝起きへの対応 ダウン症の子への愛情表現</p> <p>○その他 5 担任の手がふさがっていた ゲームとして</p>
--	---

表 5 5 歳児 「抱っこ」の主な結果

幼稚園	保育所
<p>○情緒の安定がみられた 17 落ち着いたら離れていった 抱き上げられて大きくなった実感もった 休園し久し振りの登園のよろこび実感 きげん直った 元気になった 素直になった 落ち着き泣き止んだ 少しずつ自分でできるようになった 安定して遊びに戻った トラブルやめる 順番が守れ仲よく遊べた 周りに自慢していた ありがとうと言って遊びに入った 悲しい気持ちを受け止められ仲直りした 態度が静かになり翌日からなついた 要求されないときもしていたら自分から離れてい た</p> <p>○コミュニケーションが深まった 8</p>	<p>○情緒の安定がみられた 29 昼寝のときしがみついていたが眠った 気分が和らいだ 落ち着いて遊はじめた 黙っていても笑顔でいられる 何でも話してくれるようになった ケンカの理由など落ち着いて考えられた よろこんで遊びに戻った 落ち着いて話ができた 暴れていたのが落ち着いた 悪さを止め素直に甘えてくれるようになった よく話すようになり元気取り戻した 軽く抱いてことばがけで意欲がでた 近くにばかりいたが抱いてあげると離れて一人で 遊べた 対応がやさしくなった 友と遊べた 活動の取組が積極的になった</p> <p>○コミュニケーションが深まった 12</p>

<p>あまり反抗しなくなりこちらのよろこぶ姿を子どももよろこんでくれるようになった</p> <p>○障害児 3 実習最終日寂しいと言ってくれた 落ち着いた</p>	<p>何でも相談してくれるようになった はじめて笑顔を見せた 心を開いていやなことにも自己表現ができるようになった</p> <p>○障害児 3 物事に溶け込めやすくなった いつものしに協力してくれた</p> <p>○その他 4 求め過ぎて困るようになった 忘れた</p>
---	---

〈アンケートから事例引用〉

事例1：幼稚園 女児

理由－「先生抱っこして!お家で誰も抱っこしてくれないもん。」と言って私の腰に手を回してきた。

結果－「先生ありがとうございます。今度来るときまたやってね。」と言って他の子との遊びの中に入って行った。

事例2：保育所 男児

理由－実習生全員に手を上げて長い時間叩きつけてきたため。

結果－始めは怒っていたけれどその後抱きついてきた。

事例3：保育所 男児

理由－父子家庭の子が「抱っこして」と言って手をのばしてきたので抱いたらしがみついてきたので私もさっきより強く抱きしめた。

結果－実習期間中、私が園に着くと毎朝出迎えに来て抱っこを求め、抱くと「先生結婚しようね」と言って、私から降りて「早く着替えてきてね」と言って離れた。

②4歳児について

「抱っこの理由」について、4歳児の総数では幼稚園44名に対して保育所は43名で前者が1名増で大差はない。幼稚園は「a」10名、「c」27名で、実習生からのものが17名増となり、保育所では「a」16名、「c」19名で、ここでも「c」の実習生からが3名増となっている。ただし、幼稚園は新入園児の分離不安への対応を含むものである。また、両施設を対比してみると「a」は幼稚園10名、保育所が16名で後者が6名増、「c」では幼稚園27名、保育所19名で前者が8名増となっているのにも施設それぞれの事情を反映しているものと考えられる。(図2)

そこで、項目毎の具体的な理由について考える。「a」について幼稚園をみると、母親との分離不安やケンカによるもの、また、母親の出産などが挙げられている。保育所ではここでもやはり長時間保育によるものや親の忙しさからくる関わりの不十分さが伺える。また、「c」についても幼稚園では保護者との分離不安があり、落ち着きのなさや他児とのトラブル、担任との信頼関係の不十分さが目立つ（表6）。

保育指針の中に、この時期は自意識も芽生え、目的を持って言動するなど期待から生じる不安をも抱き、その子なりの心の葛藤も体験する。その中で情緒も一段と豊かになることを踏まえ、個々の子どもの心の動きに留意せねばならないことが示されている。一番安定しているように見える時期でもあるが、かえって見落とすことのないよう直接的な関わりを大切にして信頼関係を深めていかねばならない時期である。

「抱っここの結果」についてみると、幼稚園が「f」29名、「g」8名、「h」2名、「i」5名、保育所では「f」31名、「g」5名、「h」4名、「i」3名となり、いずれも「f」の情緒の安定の項目が大きな数を示している（図3）。

具体的な項目の内容では幼稚園では落ち着いて話ができ、保育室の中に入った、仲間になった、笑顔になることができたり安心した、震えが止まった、意欲が出たなどが報告されている。保育所では自信・意欲が出た、楽しく元気に活動に参加できた、叱られることが減った、安心して眠ることができたなどに加え、外国人の子でも抱いて痛いところをさすると安心して遊びに戻ることができたことは大変興味深く、「抱っこ」が世界共通のコミュニケーションの方法であることが分かる。保育指針の「人間関係」内容の(10)に「外国人など、自分とは異なる文化を持った人の存在に気づく。」⁹⁾とあるが4歳児にかかわらず保育現場に外国の子どもの数が年毎に増加傾向にあることから、関わり方の一端をみじかな大人がモデルになって紹介することが大切であろう（表7）。

表6 4歳児「抱っこの主な理由」

幼 稚 園	保 育 所
○子どもからの要求 10 （甘え・感情訴え・不安感など） 甘えを担任に指摘され落ち込んだ後 母の出産のための入院 親との分離不安 ケンカした 遊びのため そっと近付いてきて手に触れた 泣いてきた 他児が母親に抱かれてきた 勝負に負けた悔しさ	○子どもからの要求 16 （甘え・感情訴え・不安感など） 熱があった ひざに乗ってきた 友や親との約束果されず ねぼけた 担任の紙芝居の最中 おもちゃが手に入らなかった 昼寝のとき お迎えが遅いとき いつもしっかりしているが土曜日もある

<p>○親愛の情を交わした 2 「またきてね」降園時に抱きついてきた しかっても一笑されたが後で泣いてあやまりにきた</p> <p>○自分から 19 (情緒不安・不満・愛情不足など) ケンカ後のホロー 落ちつきなく人の邪魔や乱暴をしていて保育室に入ろうとしない 悔し涙を我慢して近付いてきた 母子分離不安 あまり親に抱かれていない 母子家庭 かんしゃく起こして友に乱暴 作品が思いどおりにできず泣き続ける 登園時からきげんが悪い ほっておかれてよけいに泣いていた 途中入園で遊びの輪に入れない ケガで弱気になり頼りたそうだった (階段から落ちたなど) 不安そうに泣いていた(迎えが遅いなど) しかった後 友に父の顔の絵をけなされ泣いて震えていた</p> <p>○障害児 1 知的障害で急に泣きだす</p> <p>○その他 4 ままごとで赤ちゃんになって うんてい補助 ゲームとして</p>	<p>長時間保育の子</p> <p>○親愛の情を交わした 2 私を認めてくれた</p> <p>○自分から 27 (情緒不安・不満・愛情不足など) ケンカ しかった後のホロー 打撲で痛そうだった(ブラジル人) 寝起き悪い 暴力行為 危険なことを止めない 雨でストレス発散にたたいたりぶつかったりしてくる うんていから落ちた さみしそうに愛情を求めている 途中入園 友に嫌いと言われ</p> <p>○障害児 3 離れようとしなくなった プールをいやがっていた</p> <p>○その他 3 ゲームにかっただごほうび</p>
--	--

表7 4歳児「抱っこ」の主な結果

幼稚園	保育所
<p>○情緒の安定がみられた 29 落ち着き話ができた ただ話すだけより長時間落ち着けコミュニケーションを取ってくるようになった 泣き止み遊びに入った いっぱい泣いてすっきりした ち着き元気になり笑顔になった 保育室に入った やりたくないと言っていた製作をやりはじめた 安心して眠った 安心して泣いた理由を話した</p>	<p>○情緒の安定がみられた 31 落ち着いて遊んだ 外国人の子でも痛いところもさすると安心して遊びに戻っていった 自信・意欲が増した 心癒され次の遊びへのステップになった 満足感を与えた 抱くときにあらかじめ制限を相談しておいたので 途中から一人で歩いた たのしく元気に活動に参加できた 落ち着いて話ができた</p>

<p>後ばかり追ってきていたがその後自分から仲間に加わり遊べた 自分でやる意欲がでた 震えがとまり泣き止んだ 友のものの取らなくなった ものを交替で使った</p> <p>○コミュニケーションが深まった 8 その後びっくりするほど抱き着いてきて笑いかけたり話しかけるようになった 反応のなかった子がそれ以後はなしかけてくれるようになった スキンシップは嫌がるがうんていだけは抱き上げるよう頼んでくるようになった</p> <p>○障害児 3 泣き止んだ</p> <p>○その他 4 抱くと落ち着くが降ろすと泣く 毎日のように抱っここと言うようになった</p>	<p>しかられるようなことが減った 眠った ケンカの仲立ちをするようになった 泣き止んで次の遊びに興味をもった 落ち着いて笑顔になった</p> <p>○コミュニケーションが深まった 5 次の日から慕ってしてくれるようになった 素直にかかわってくれるようになった</p> <p>○障害児 3 じっとしていた 離れようとしなかった</p> <p>○その他 4 効果は分からない 忘れた</p>
---	--

〈アンケートから事例引用〉

事例 1 : 幼稚園 男児

理由—いつも一人でいる男の子で、隣のクラスだったのですが、そろそろと近づいてきて、手を触るのでギュッと抱いてみました。「どうしたの?」と声を欠けながら。

結果—びっくりするほど抱きついてきてくれて、それから園庭で会うといつもニコニコといろいろな話をしに来てくれました。(以前は話をすると逃げて行ってしまった。)

事例 2 : 幼稚園 女児

理由—5月の頃の実習の時、その女児は新入園児で友達の輪に入れず泣いていたから
結果—普段話しかけてもあまり反応の無かった子だったが、それから何となくよく話しかけてくれるようになった。

事例 3 : 保育所 女児

理由—「抱っこして」と言ったため。病院の娘さんで土曜日は必ず少人数の中にいる子。両親とも働いていて、普段も長時間保育の子。きっと寂しくて甘えたいんだと思った。

結果—抱っこしたら赤ちゃんのように顔を胸に埋め、ほっぺを私のほっぺに擦り寄せ

てきた。他児とかかわりながら受け入れていた。手を離しても離れないほどしがみついている、なかなか降りないので自分が座った。他児の遊びをしばらく私の膝で見えていたが（紙飛行機飛ばし）、自分から立ち上がり、「先生紙飛行機折って」と折り紙を持ってきた。

③ 3歳児について

「抱っこの理由」については、幼稚園は98名に対して保育所は82名で、幼稚園16名増、また、「a」23名、「c」68名となり、「c」の実習生からのものが45名増となる。保育所では「a」15名、「c」61名で、「c」が46名増となる（図2）。

具体的な項目毎の理由をみると「a」の幼稚園では新学期における保護者との分離不安や生活に不馴れで疲れたり情緒不安になったりしているものが非常に目立つ。保育所ではやはり分離不安もあるものの長時間保育での影響が強い。また、昼寝からの寝起きやきょうだい誕生による甘えへの不足感、ケンカでの心のはけぐちなどが現れている。「c」について幼稚園では、分離不安や落ち着いて座ってられないなど集団生活に馴染めないゆえのもの、特に他児とのトラブルが目立つ。保育所でも分離不安、食事や活動への不満など集団生活適応の問題、ケンカ・怪我などのトラブル、体調不調、母親の妊娠など多くの不安を抱えている（表8）。

「抱っこの結果」をみると、幼稚園が「f」84名、「g」8名、「h」0名、「i」6名、保育所では「f」70名、「g」6名、「h」1名、「i」5名となり、いずれも「f」の情緒の安定の項目が大きな数を示している（図3）。幼稚園では98人中84名が情緒の安定を示し、8名がコミュニケーションが深まったとしている。保育所では82名中70名が情緒の安定を示し、6名がコミュニケーションが深まったとしている（図3）。

幼稚園・保育所での具体的な「結果」をみるといずれも落ち着いて泣きやむ、元気になり笑う、悪いことを止め、素直さや話をするなど非常に態度の好転が見られる（表9）。

表8 3歳児「抱っこの主な理由」

幼稚園	保育所
○子どもからの要求 23 （甘え・感情訴え・不安感など） 新学期母子分離不安 新学期情緒不安 はじめての活動参加不安 年長児からの世話のされすぎ 延長保育時の雷 父親参観で父と離れ	○子どもからの要求 15 （甘え・感情訴え・不安感など） 友（年長）からたたかれた ひざに乗ってきた 転んでびっくりした ケンカ 普段あまり話さない子 入園後間もなくさみしくなった

- 母親の妊娠
ケンカ
公開保育への母親の不参加
ひざに乗り頭や髪にさわる
一人ぼつんとしていた
高いところから降りれない
施設の子で日ごろ甘えられない
眠かった
運動会の練習に疲れた
いつもこない子が甘えてきた
眠かった
- 親愛の情を交わした 3
登園時走って飛び付いてきた
毎週甘えてくるようになった
笑顔をみせるようになった
- 自分から 68
(情緒不安・不満・愛情不足など)
新学期母子分離不安
落ちつきなく座ってられない
新学期情緒不安
友よりいたずらを非難された
転んだ
しかった後
給食が全部食べられた
入園時の身体測定
保育室に入らない
腹痛
母親妊娠中
運動会の練習の疲れ
登園拒否
キンキン声で要求訴え友になじられる
さびしそうに頑具を眺めていた
友にトイレに閉じ込められた恐怖感
きげん直し
内診検査の不安
養護施設の子集団に入れない
友にケガをさせた
常に不安そう
男性を見ると泣く
日ごろと様子が違ってすぐ泣く
- その他 4
担任の指示
ゲームとして
うんてい補助
- 母子分離不安
保育時間が長く親が忙しいので常に抱きついたり
手をつないだりしてくる
大好きと言ってきた
痛くて泣いてきた
家では弟の手前甘えられない
昼寝からの寝起き
- 親愛の情を交わした 3
はめられなかったボタンを2人で2週間がんばって成功した
お別れのとき泣いた
- 自分から 61
(情緒不安・不満・愛情不足など)
給食に嫌いなものがあった
母親の妊娠
怖い夢
いつも友や先生を嫌いと言っている子
プールがいや
ハサミ投げ叱られた後
我慢できたとき
転んだ
昼寝からの寝起き(寝汗・恐いゆめ)
遊びの援助(うんてい)
縦割りクラスのプレッシャー
母子分離不安
いつも強がっている子が近付いてきた
担任にしかられずねていた
頭をぶつけた
素足で外に出るなど様子に疑問を感じた
親が忙しく長時間保育
ケンカ
友達をたたいた
双子としての育ちかた
入園して間がない
いけないことを止めない
体調悪い
お迎え遅い
アトピーのかゆみがひどい
しかった後のホロー
活動に参加しない
避難訓練のとき
お茶こぼして友にからかわれた
- 障害児 1
自閉症児読み聞かせ中声を出す

	○その他2 ゲームとして
--	-----------------

表9 3歳児「抱っこ」の主な結果

幼稚園	保育所
<p>○情緒の安定が見られた 84 一度抱いたら後はもう要求しなくなった 落ち着きあやまりにいった 活動参加できた 眠れた 落ち着き泣き止んだ 話しはじめた（返事するようになった） 自分から離れ保育室に入った 甘えたい気持ち解決した 元気になる笑った すねていた しかられたわだかまりがきえた</p> <p>○コミュニケーションが深まった 8 毎日抱き着いてくるようになった 親近感がわいた 毎週甘えてくるようになり笑いかけるようになった</p> <p>○その他 6 抱かれているのを見て他の子も要求してきた よけいに泣いた 落ち着いたがその日一日不安定 安定しない（休みの多い子など） 離れなくなった（癖になった） 後から手つなぎにして子どもから離れるようにした</p>	<p>○情緒の安定が見られた 70 翌日から泣かずに登園 友と仲直りできた 自主的に活動参加（遊びにいった） 安心して寝た（落ち着いて寝た） ケンカ減った 悪いことをしなくなった 笑顔が戻り元気になった 給食の嫌いなものへの食べる意欲がでた たたかなくなった（なぐりかかったきたがやめて落ち着いた） 落ち着いて泣かずに目覚めた 外に出ていかなくなった 話をするようになった 泣いた理由を話し問題を解決できた うんていが好きになりくり返すうち一人できるようになった アトピーの子の気がまぎれた</p> <p>○コミュニケーションが深まった 6 笑顔で話しかけてくるようになった</p> <p>○障害児 1 落ち着いた</p> <p>○その他 6 効果がない 離れようとしなかった</p>

〈アンケートから事例引用〉

事例1：保育所 女児

理由—朝の登園の時、母親と離れるのを嫌がっていたので、母親のように接したらいいかと思ったから。（その子の母親のお腹には赤ちゃんがいたから、その子は最近目立った行動をとるようになっていた。）

結果—抱いた直後はまだ泣いていたが、母親が見えなくなると私の腕の中でおとなしくなった。

事例 2 : 幼稚園 女児

理由—4月で入園したばかりで、「お母さんがいい!」と言って不安な様子だったから。

結果—少しずつ安定していき、友達の中に入れるようになって、泣いていたことなんて忘れたように楽しく笑っていた。

事例 3 : 保育所 男児

理由—人っ子で育てられている子で他人のものを「貸して」という前にとってしまうのでよくけんかをします。相手をたたいているのを止めさせるのと、落ち着いてもらうために抱きました。

結果—最初は私にも殴りかかってきましたが。ギュッと抱きしめると、次第に落ち着いて私の話も聞けるようになりました。

④ 2 歳児について

「抱っこ理由」では73名中、「a」14名、「c」52名、「c」が38名増となる(図2)。この時期は歩行機能の基本の充実やことばが一層豊かになり「安心できる保母との関係のもとで、保育者と一緒に」¹⁰⁾ 様々な体験を重ねていくことが大切である。

具体的な理由の内容についてみると、「a」、「c」共、長時間保育や分離不安、自分の思いや意欲と現実とのギャップからのトラブルなど生活や遊びへの適応のため、実習生と直接的触れ合え、受け入れられていることが実感できる「抱っこ」への要求が強い(表10)。

「抱っこの結果」では「f」59名、「g」5名、「h」0名、「i」9名となり、いずれも「f」の情緒の安定の項目が大きな数を示している(図3)。

具体的「結果」の内容としては、機嫌の改善、安心できた、落ち着いた、そして、食べられた、眠れた、排泄できたなど生活への前向きな姿勢が引き出されている。また、他児やものとのかかわりの潤滑油的効果を発揮している(表11)。

表 10 2 歳児「抱っこの主な理由」

保 育 所
○子どもからの要求 13 (甘え・感情訴え・不安感など)
長時間保育の子
担任にしかられて甘えてきた
ケンカ(突き飛ばされた・たたかれた)
壊していけないものを取り上げられて
行事に保護者がこなかった
座る席がなかった
母子家庭

表 11 2 歳児「抱っこの主な結果」

保 育 所
○情緒の安定がみられた 58
泣き止んで普通に食べられたすぐにおしっこするようになった
落ち着き自分から遊びへ参加
落ち着き泣き止んだ
イスを用意したらすぐ離れた
安心出来た
気持ちよく寝た
親にバイバイが言えた

積木から降りられなくなった
 家庭のトラブルでいらだっていた
 母子分離不安（ひざのうえでブロック遊び）
 天井飾りに触りたい
 実習最終日

○親愛の情を交わした 3

日ごろ笑顔のない子の活動を認めよろこんだら
 ひざのうえで来た
 コミュニケーションのため
 人とかかわろうとしない子だった

○自分から 51

（情緒不安・不満・愛情不足など）
 おばけが怖い
 昼寝できない（母親に会いたいなど）
 昼寝での寝起き
 しかったあと（おしっこをしない、やっていけないことをしたなど）
 母子分離不安（特に月曜日の朝など）
 体調不調
 転んだ（口を切ったなど）
 甘えを受け止めるとき
 ストレスで熱（休園多い）
 ケンカで泣いた（おもちゃなど）
 こわい夢
 元気がない
 途中入園
 遊びに入れない子に気付かなかった
 理由なく泣く子
 反抗への対応（おやつをたべないなど）
 やすみあけ
 きげんわるく何でもいやがった
 長時間保育で泣いて感情訴えてきた
 保護者の迎えが遅くて不安
 転びそうになった

○その他 1

昼寝前に全員を抱きしめる担任を見習った

変わりのおもちゃで遊べた

友にあやまった

会話ができた

居場所をつくれた

ケンカおさまった

いじわるしなくなった

親について本音を伝えてきた

自分からやる気になった

○コミュニケーションが深まった 4

キスをしてくれた

うれしそうに笑うようになった

○その他 6

自分を1:1でちゃんとみてほしいがる

お迎えが来るまでくっついたまま

毎日抱っこ要求（母子家庭）

かまわれるのをいやがった

あまり効果がでなかった

次の日また同じことを繰り返した

〈アンケートから事例引用〉

事例1：保育所 女児

理由—おしっこをするときなかなかしなくて、出るのに出ないと言うので時間をかけて励ましたり、少し厳しくしたりして、おしっこが出た後、おもいっきり褒めながら抱いた

結果—とてもうれしそうで、次におしっこするときはずぐにするようになった

事例 2 : 保育所 男児

理由—反抗期の真っ盛りで、何かにつけて反抗する。この日もおやつを食べなかったの
で、言葉で言うより抱くことでなんとか食べてくれないだろうかと思って。

結果—自分から食べると言い出した。

事例 3 : 保育所 女児

理由—それまでは全然平気だったのに、突然「ママ…ママ…」と言って半泣き状態で
抱きついてきたため。

結果—ギョッと 5 秒間ぐらい抱いていて「もう大丈夫?」と聞いたら、もう大丈夫に
なったらしく、「うん」と答え、その後楽しく過ごせるようになった。

⑤ 1 歳児について

「抱っこ理由」では 1 歳児 51 名で、「a」25 名、「c」22 名、ここでは他の年齢の子
どもの場合と逆転して、子どもからのものが 3 名増となっている (図 2)。保育指針には
1 歳 3 カ月から 2 歳未満児の発達の主な特徴として、この時期のめざましい運動機能の発
達を挙げ、つかまらずに歩けるようになることから広がる生活空間の中で、探索行動の活
発化、片言、身振り手振りによる対人関係の深まりや象徴機能の発達が著しいなど自立に
向かう過程の時期であり、それだけに危険を伴うことも多く、目の離せない時期でもある。
このような子どもの活動はそまでに培われた安心できる関係を基盤としていることが明記
してあることから保育者の役割は一段と重要となる。保育指針の 6 ヶ月未満児から 2 歳児
未満児までの「ねらい」の(2)として「個々の子どもの生理的欲求や甘えなどの依存欲求を
満たし、生命の保持と情緒の安定を図る¹¹⁾」と記述されている。これらのことは、学生た
ちのアンケートのなかにもよく現れている。

具体的な「理由」の内容では、「a」としてつかまりだちの失敗や目新しいものに触り
たいなどから、泣いているとき顔を見せたら抱きついてきた、両手を広げてみせたら飛び
込んできたなどが示され、中には、テレビ番組の出演者の顔が恐かったなど微笑ましいも
のも含まれている。また、「c」ではさらに危険な行動やそれに伴う怪我などの対応に追
われている様子が見える。ここでは「抱っこ」が保育の中心的保育者の活動となると言っ
ても過言ではない (表 12)。

「抱っこの結果」については「f」41 名、「g」5 名、「h」0 名、「i」5 名となり、
いずれも「f」の情緒の安定の項目が大きな数を示しており、1 歳児 51 名中 41 名となっ
ている。また、ここでは 5 名がコミュニケーションの深まりも示している。(図 3)

具体的な「結果」の内容として「f」では転んで泣いても抱き起こすと泣きやみ安定し

たこと、笑顔になる、再度つかまりだちに挑戦する、再び遊び始めるなど意欲的で前向きな態度が現れている。「g」では何かある度に手を広げるとニコッとハイハイしてきて抱きつくようになったなどが記述されている（表13）。

表12 1歳児「抱っこの理由」

保育所
○子どもからの要求 13 （甘え・感情訴え・不安感など） 安心して眠った 泣いて顔を見せたら抱き着いてきた ケンカ（水をかけられたなど） 高いところにあるものを触りたかった 長期欠席後の登園 お母ちゃんとは何度も聞くので両手広げたら飛び込んできた 泣きわめいていたのでしゃがんだら抱 テレビの出演者が怖かった 手を広げて表現した
○親愛の情を交わした 4 ことば通じないので手を広げてみた 人見知りの子がなついた
○自分から 19 （情緒不安・不満・愛情不足など） 眠れない（布団で眠れないなど） 母子分離不安 理由なく 窓を指さして窓の外を見たがった 親のスキンシップ不足で乱暴 母を思い出した つかまり立ち 昼寝の寝起きにぐずった 降園時の他児のお迎え見て泣いた 危険な行動 声をかけても動こうとしなかった 頭をうった ぶつかった（友やものになど） ミルクの時間 人見知り 環境になじめない 不安そうなとき 泣いて何か訴えてきた 妹が生まれた おもちゃをとられた

表13 1歳児「抱っこの結果」

保育所
○情緒の安定がみられた 36 安心して眠った 泣き止み他の子の遊びをみていた すぐ離れて遊べた 別のおもちゃで遊びはじめた 再度つかまり立ちにチャレンジ 抱き起こすと泣かずに安定 笑顔になった 外をみせると満足して遊び続けた 笑顔で別れられた テレビは見なかったが安心できた
○コミュニケーションが深まった 2 何かあるたび手を広げるとにこっとハイハイしてきて抱き着くようになった
○その他 4 効果なかった 泣き止んだがずっと抱かれていたい 降すとまた乱暴行為を再開 座ると泣く立つと泣き止んだ

〈アンケートから事例引用〉

事例 1：保育所 女児

理由—お昼寝の目覚めの時間になっても起きたくなくてぐずっていたから。

結果—普通に起こそうとするとすごい勢いで泣くが、抱き起こすと泣きやみ、次の活動に移ることができた。

事例 2：保育所 女児

理由—降園時間になり、他児のお母さんやお父さんが迎えに来ると寂しくなり泣き出したため。

結果—抱いて他のことで気を紛らわすことによって安心して泣きやんだ。

事例 3：保育所 男児

理由—おもちゃの取り合いをして全部おもちゃをとられてしまった。

結果—その子を抱いて相手の所に行き、おもちゃはみんなのだから一緒に遊ぼうねと言うと 2 人で仲良く遊び始めた。

① 0 歳児について

「抱っこの理由」では 28 名に対して「a」4 名、「c」23 名で子の年齢では当然ながら実習生からのものが多く、その差は 19 名となっている（図 2）。

具体的な「理由」の内容では「a」新しい場所への移動、眠くなった、ぶつけた、抱き癖などになっており、「c」でも抱き癖がめだち、転んだりぶついたり、物事を嫌がったり恐がったりして抱っこを求めている（表 14）。

「抱っこの結果」では、「f」24 名、「g」3 名、「h」0 名、「i」1 名、「e」1 名で「f」が 1 歳児 28 名中 24 名とほとんどを占めている。（図 3）

具体的な「結果」の内容としては、安心して活動に入る、喃語を発する、食べる、眠るなどに加え、胸に顔を埋めて泣きやむなど甘えも受け入れられた様子が伺えて、信頼関係も築かれているのが分かる。保育指針では 6 カ月から 1 歳 3 カ月未満児についての配慮事項として「(3)保母との暖かいふれあい、保母の優しい語りかけが、子どもの情緒を安定させ、順調な発育・発達を支えることを認識して子どもに接するように心掛ける。」¹²⁾ とあるが、「抱っこ」によりこれらの「配慮」は充実され、学生たちは十分にその成果を挙げている（表 15）。

表 14 0歳児「抱っこの主な理由」

保 育 所
○子どもからの要求 25 (甘え・感情訴え・不安感など) 抱き癖 給食の途中眠くなった 頭を床打った 外に出るのを禁止された 新しい部屋に移った ひざの上に座り込んできた(つかまり立ちのあと抱き着いてきた) 抱っこして食べさせたらきげんよく食べた、ハイハイで急いでそばにきてくれた
○自分から 23 (情緒不安・不満・愛情不足など) 熱 床で頭をぶつけた 母を思い出した 大きい子に押し倒された きげん悪い 水遊び怖かった 抱かれないと眠れなかった 転んだ 泣いていた(寝起き) 不安そうな顔をしていたとき 抱き癖 給食食べずぐずった

表 15 0歳児「抱っこの主な結果」

保 育 所
○情緒の安定がみられた 24 落ち着き眠った(安心して) すぐきげんなおった 遊びはじめた(抱かれていれば安心しておもちゃなどで) 胸に顔をつけて泣き止む(安心して) 安心して水に入れた 喃語を発した あきると自分から遊びに行った 抱っこして食べさせたらきげんよく食べた、その後一人で食べた
○親愛の情を交わした 1 次の日から寄ってくるようになった
○コミュニケーションが深まった 3 よろこんで笑いかけるようになった 次の日から寄ってくるようになった
○その他 1 降ろそうとすると泣いた

〈アンケートからの事例引用〉

事例1：保育所 男児

理由—水遊びの時に恐がって抱っこを求めてきた

結果—安心して泣くのを止め、水に入ることができた

事例2：保育所 女児

理由—給食を食べている最中に食べなくなり、ぐずり始めて抱っこを求めてきたので。

結果—少し抱っこをして食べさせていたら食べて機嫌もよくなり、その後席に戻したらきちんと食べるようになった。

事例3：保育所 男児

理由—ベットで寝ていてハイハイしようとしたとき、頭がベットの手すりに当たってしまい大泣きした。

結果—頭を何度も優しく撫でてやり。体をトントンしていたら泣きやみました。

上記のように、保育現場においては、5歳児・4歳児・3歳児でも年齢が低くなるほど「抱っこ」が必要とされ、その効果も大きい(図4)。特に、保育所ではいくら子どもが慣れ、落ち着いた時期であっても大人から受容されることが幼稚園以上に保育者に求められる。この点は未満児になるほど大切な保育者の活動として「抱っこ」が実践されているのである。

5 「抱っこ」の心がけ

「質問2 保育の中で子どもを抱くとき、どんなことを心がけていますか。」について自由記述の内容により「抱く前について」「抱いているときについて」「具体的事項について」「その他について」などの項目にまとめた。この質問形式をとったのは、出来るだけ実際に即した学生の活動を把握したかったことにある。しかし、内容が重複していたために数値化するのは困難であったため、大まかな傾向として考察した。

① 「抱く前について」

この項目を細かくまとめると、「その子の求めに応じる」として子どものほうから求めやすい雰囲気を用意しながらあくまでも子どもの自主的で主体的な行動によるものとしている。また、「その子にとっての必要性で判断する。」として、その子の発達や性格、家庭事情など抱いた後どんな結果を招くのかなども考慮した実践を心がけている。

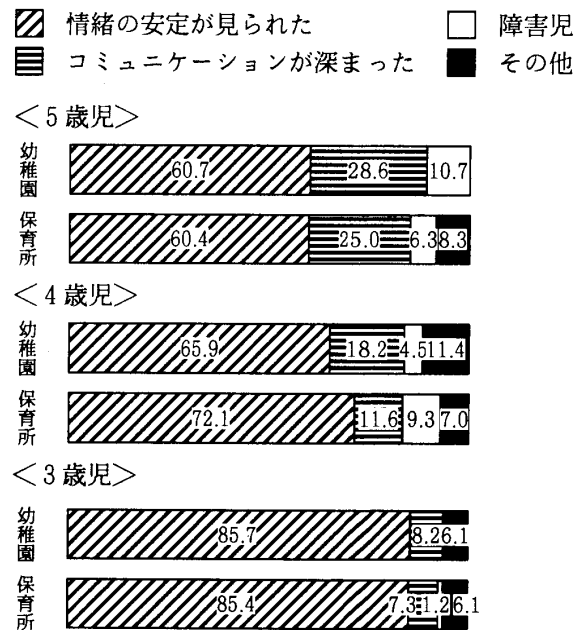
② 「抱いているときについて」

この項目では、「他に興味を向けて自分から離れていけるようにする。」として抱いた後、子どもの満足感を大切に、段階を追っての自立に向けた援助が考慮されている。また、「心の動きを読み取る」として、子どものありのままの心情などを考慮し、その子の心の流れに即し、思いやりをもって愛情深いかかわりを心がけようとしている。

③ 「具体的事項について」

この項目には、実際現場で「抱っこ」を受け入れるとき、または抱いているとき、具体

図4 「抱っこの結果」



的にどのようなにするのかという実践能力を中心にまとめた。ここでは子どもの要求や必要性を考慮しながら対応する、非常に具体的な事柄が記述されていた。抱いているときは子どもときちんと目を合わせ、危険のないよう、体を包み込むように優しく抱擁しながらとばがけで心をほぐし、その子の思いに誠実に耳を傾けつつ、気分転換のさまざまな活動を試みる。また、他児への影響や連鎖反応、抱いた後の予測など細やかなことがらについての配慮が見られるのである。

④ 「その他について」

ここでは、上記に属さず、授業での感想や実習園で印象深かったこと、また、「抱っこ」実践への不安など小数のものをまとめた。

これらを全体的に見ると、ひとり一人の学生がそれなりにひとつの場面に対して情愛に溺れ保育の視点を見失うことなく、子どもの立場に立った対応をしようとしている姿勢が現れている。

IV まとめ

以上のように、「抱っこ」を通してさまざまな視点から保育実践の中での学生と子どもたちとのかかわりをみてきた。領域「人間関係」に示されている人とのかかわりの基礎は、周囲の人々に暖かく見守られて安定感が生まれ、そこから人に対する信頼感を持ち、自分自身の生活を確立していくことによって培われる。子どもの生活にとっては何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それが生活の基盤となることも、すでに冒頭で述べた「教師の役割」にも強調されていた。学生は実習を通して「抱っこ」を大切な保育者の活動として位置づけ、その意味や必要性を押さえながら子どもたちとの信頼関係を築き、子ども理解を深め、援助者としての役割も担っていた様子が認められた。そして、こうしたことから、保育の中での「抱っこ」の重要さと人間関係にもたらす意味を再確認できた。社会変化の中で幼稚化なども否定できない面も見受けられ、「子ども好き」が主な動機での入学が目立った学生たちであったが、本研究のなかで認められた子どもへの暖かい心づかいと保育者としての成長、そして、保育への取り組みの姿勢に今後への期待を寄せたい。また、紙面の都合で「抱っこの心がけ」については簡略化してしまったが今後の研究に活かしたい。

本研究をまとめるに当たり、アンケートに誠実に回答を寄せてくださった多くの学生の皆さんに感謝すると共に、これを今後の授業充実への一助としたい。

〈引用文献〉

- 1) 調査研究協力者会議（案）「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育のあり方について」（中間報告書）
平成9年 p. 7
- 2) 厚生省児童家庭局「保育所保育指針」日本保育協会 平成2年 p12
- 3) 前掲著 p.38
- 4) 文部省「幼稚園教育要領」ぎょうせい 平成2年 p. 4
- 5) 厚生省児童家庭局「保育所保育指針」日本保育協会 平成2年 p.32
- 6) 前掲著 p.38
- 7) 前掲著 p.52
- 8) 前掲著 p.59
- 9) 前掲著 p.43
- 10) 前掲著 p.30
- 11) 前掲著 p.20
- 12) 前掲著 p.22

〈参考文献〉

- 1) 厚生省児童家庭局 「保育所保育指針」 日本保育協会 平成2年
- 2) 文部省 「幼稚園教育要領」 ぎょうせい 平成2年
- 3) 文部省 「幼稚園教育指導書増補版」 フレーベル館 平成元年
- 4) 文部省 「幼稚園教育指導書」 フレーベル館 平成元年
- 5) 国際子ども研究所編 「保育所保育指針解説」 北大路書房 1990年
- 6) 小玉武俊編者 内容研究「領域 人間関係」 北大路書房 1995年
- 7) 調査研究協力者会議（案）「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育のあり方について」（中間報告書）
平成9年
- 8) 岡本夏木他監修 「発達心理学辞典」 ミネルヴァ書房 1995年
- 9) 岡田正章他編者 「現代保育用語辞典」 フレーベル館 1997年
- 10) 田中未来他編者 「子どもの教育と福祉の辞典」 健社 平成4年
- 11) 岡田正章他編集 「保育学大事典 第2巻」 第一法規出版 昭和58年

資料

○こどもを「抱く」ことについて下記の質問に答えて下さい。

1. 保育現場で子どもを抱くことが何度かあったと思いますがどんなときに抱きましたか。またその理由は何でしたか。そして抱くことによつとどんな効果（変化）がありましたか。

① 場所 a 幼稚園 b 保育所
 子どもの年齢 歳児
 性別 a 男 b 女
 理由
 効果

② 場所 a 幼稚園 b 保育所
 子どもの年齢 歳児
 性別 a 男 b 女
 理由
 効果

③ 場所 a 幼稚園 b 保育所
 子どもの年齢 歳児
 性別 a 男 b 女
 理由
 効果

2. 保育のなかで子どもを抱くとき、どんなことを心がけていますか。